もう二度と…

萌歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう二度と…

【Ｎコード】
Ｎ９５５３Ｙ

【作者名】
萌歌

【あらすじ】
外は雨。万事屋も、いつになく静まり返っている。と、そこに真選組が！？そして突きつけられた事実。銀時は・・・

プロローグ（前書き）

ちょっとこれだけは書いておかないといけないなぁ～と思って急ピッチで仕上げました。

文脈等、変なところがありましたら感想などにて指摘お願いします！

プロローグ

夢を、見た。

『銀時、小太郎、晋助、――。』

まだ松陽先生が生きていた時の、夢。

『はい！』

雲一つない青空

『何でしょうか、先生。』

頭上には雀が飛んでいて

『何？』

風は穏やかに俺達の間を抜けていく

『――。』

そんな、幸せな時間。

『その遊びは、楽しいですか？』

みんな、笑っていた。

『はい。』

ヅラも

『もちろん！』

高杉も

『まあね。』

俺も

『――――!』

アイツも

『そうですか。

松陽先生も、笑ってた。

なら、よかったです。』

俺が1番幸せだった時。

もうこんな時間来るわけがない。

皆、変わっちまった。

一人は、商売で宇宙を繋ぐと言い

一人は、穏やかに国を変えると言い

一人は、この国をぶっ壊すと言い、

一人は、もう終わりにすると言った。

じゃあ、”アイツ”は……？

今、どうしているんだろう。

プロローグ　end

プロローグ（後書き）

「アイツ」とは誰なのか！？

ちなみに、辰馬ではございません。

センセー、「アイツ」のキャラ設定イマイチ決めてないアホがこんなところにいまーす。

何だって？？

す、すみません……今一生懸命考えてますので……

問答無用～キャラ設定決めてないのに、もう出す馬鹿がいるかってのってなわけで萌歌！！廊下に立ってなさーい。

はい、てなわけでオリキャラ出します。よくあるネタなんで皆さん直ぐに分かるかと思われますが……

とりあえず、よろしくお願いしますm（＿＿）m

言葉の禁……《笑顔》（前書き）

短篇としてＵｐしていたものを連載としてＵｐし直しました！

内容は変わってません！！

言葉の禁……《笑顔》

外は雨。もう何日もこんな日が続いている。太陽がないと自然と気分も晴れない。
当然万事屋もいつもの騒がしさから比べれば、だいぶ静かだった。

しかし、今日の静けさの原因は雨だけではない…と新八、神楽は思っている。

おかしいのだ、あの人の様子が。

いつもはジャンプだ甘味だと言って、ソファーにウダウダ寝っころがっている銀色だが、今日は社長イスに座り、ぼぉっと空を眺めていた。心なしか、銀色の周りの空気もピリピリしている。

「銀さん、調子悪いんですが？」

念のため新八が問い掛ける。十中八九違うだろうが。

「ん？あぁーそんなことねーよ。
たまには銀さんだってぼぉっとしたいんですー。」

「銀ちゃんがぼぉっとしてるとか何アルか？明日は槍が降るアルか？」

「ちょっと神楽ちゃーん？何物騒なこと言ってんの？女の子がそんなこと言っちゃいけません。ってか俺がぼぉっとしてるだけでそれとか酷くない？」

「だって事実ネ。」

～銀時Ｓｉｄｅ～

……バレてたか。

出来るだけイライラを出さないようにしていたつもりだったが、地味に長い付き合いのこいつらには効かなかったらしい。

どうにも嫌な予感がする。昔から嫌な予感だけは当たってしまう。
それに、最近自分の周りをうろついてる奴らもいる。

「……もうダメか。」

銀時はそう呟くと和室に入っていった。

～銀時Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ～

銀時が和室に入って数分。玄関のチャイムがなった。依頼人かと思ったが、今日は銀時が用事があるらしいので、内容によっては断ろうと考えつつ、新八は玄関に向かった。

「はーい、今出まーす。」

ガラッ
何度も壊され、だいぶ建て付けの悪い扉を開けた先にいたのは、真選組のいつもの3人組、近藤、沖田、土方だった。

「やぁ、新八君。」

最初に言葉を発したのは近藤。間髪入れず沖田が「旦那居やすかィ？」と続けた。

「銀さん、ですか？」

「ああ。」

「依頼ですか？…まぁとりあえず上がってください。」

「邪魔するぜ。」

3人を応接間に連れていくと、音が聞こえたのか、銀時が和室から

顔を出していた。

「税金ドロボーさん達が揃いも揃って何の用？言っとくけど、今日は銀さん忙しいんですー。」

「万事屋、お前に聞きたいことがある。」

「…何？」

そういって怪訝な顔をして出てきた銀時はいつもの和洋折衷の服ではなく、白地に薄紅の桜があしらわれた、一目見ただけで上物と分かる着物に、濃紺の羽織という格好をしていた。銀時の銀髪によく映えている。

それを見た土方は苦虫を噛み潰したような顔を一瞬して、万事屋、と口を開いた。

「……お前が、白夜叉だな？」

沈黙。

恐ろしい程に空気がピンと張り詰めた空間が広がった。銀時は俯いており、表情を伺うことは出来ない。

「……やっと気づいた？」

数秒後、顔を上げてあっけからんとそう言い放った銀時。その顔は妙にサッパリとしていた。

「旦那……」

沖田の端正な顔が辛そうに歪む。

「で？どうすんの？俺を捕まえる？」

「ああ。坂田銀時、天人大量虐殺罪でお前を逮捕する！」

「……フフフッ」

軽く笑った銀時の目は、全く笑っていない。背後には殺気も漂っている。

「何笑ってやがる！」

うっすらと冷や汗をかきながら、土方も負けじと睨み返す。

「いや、あのヅラさえ捕まえられないお前らが天下の白夜叉様を捕まえられるのかなー？って。」

刹那、銀色の風が吹き、真選組の3人は床に伏せられていた。

「無理じゃん」

嘲笑した銀時自身は既に入口のところまで移動している。その手にはいつの間にか深紅の鞘に収められた真剣が握られていた。

「…ッ白夜叉ァァア！」

「……ッ銀ちゃんは白夜叉なんかじゃないアル！銀ちゃんは銀ちゃんネ！」

「そうだ！銀さんをその名前で呼ぶな！」

やっとのことで声を絞り出した2人。あまりの展開に呆然としていたが、土方が吐いた言葉にようやく我に返った。

「……出てこいよ、いるんだろ？」

2人の言葉に少し頬を緩めると、どこかに向かい声を上げた銀時。そうすると、音も無くドアが開き、あまりにも有名すぎる3人が顔を出した。

「……ッッ桂……高杉…！！」

「……ッ！！お前は快援隊の……！！」

喉から手が出るほど捕まえたい相手が目の前にいる。なのに銀時の峰打ちのせいで動けない。そのことは土方や沖田、近藤を酷く苛立たせた。

「いつから気づいておったのだ、銀時。」

「ヅラが分かりやすすぎるんだよ。」

「ヅラじゃない桂だ。それに高杉、何故お前が答える、俺は銀時に聞いておるのだ。」

「うるせェ、ヅラ。」

「ヅラじゃない桂だ。」

「まあまあ落ち着くぜよ。わしらは銀時に会いに来たんじゃ。」

「……悪かった。」

ハッハッハと黒い笑顔で辰馬が笑うと桂がバツが悪そうに謝る。……しかし、高杉は華麗にスルーし、銀時に向き直った。

「銀時ィ、大切な兄弟より幕府の狗の方が優先ってかァ？」

「ゴメンね、晋助。捕まってた。早く行きたかったのに。」

「ッッお前用事って……！！」

「そうだよー。この3人と会う約束してたの。」

「信じてたのに……ッ」

「やっぱり鬼はいつまで経っても鬼ってことかよッ！」

浴びせられる罵声。

「見損ないやした。」

侮蔑の眼差し。

その光景は銀時の中である出来事をフラッシュバックさせてゆく。

「……に」

「……銀時？」

桂が呼びかけても、何の返事もない。そのかわりに聞こえてきたのは最悪の単語。

―――鬼

「……そうだよ、おれは鬼。…鬼はしあわせになんかなっちゃいけないんだ。」

「……ぎ、ん…ちゃん？」

「ッッ銀時！！」

「何言ってんだテメェ！！」

「銀時！！」

桂、高杉、辰馬が駆け寄る。のろのろと顔を上げた銀時の目は輝きを失い、何も映していない。

「銀時！！お前は鬼などではない！」

「テメェは俺達の大切な弟だ！！」

「わしらを見てくれとおせ銀時！！」

焦点の定まらない虚ろな目がゆっくりと3人を映す。

「……しんにぃ、こたにぃ、たつにぃ？」

「あぁ、そうだ。」

「帰ろう、銀時。」

「松陽先生の元に戻ろうぜィ。」

「もうこぎゃんところにいる必要はなか。」

「……うん、帰る。せんせいのところにかえるよ。」

「……おまんら、」

坂本が口を開く。真選組の3人は銀時の変わりように驚きを隠せないでいた。

「銀時に鬼という単語は禁句じゃ。なのにおまんらは…ッ！！」

その言葉に付け足すように、高杉が憎々しげに切り出す。

「どうして俺やヅラがテメェらに手を出さなかったか教えてやろうか。」

「……銀時が、真選組の奴らは良い友人だ、と言っていたからだ。貴様らが銀時に気に入られていたから、俺達はお前らに手を出さなかった。」

「……ッ！！」

「なのに、テメェらはいとも簡単にそれを裏切ったんだぜィ？」

銀時がそんなことを思っていたと知った3人。今さらながらしでかしてしまったことの重大さを痛感した。

「だが、もう容赦はせん。」

「真選組や幕府はもうすぐ俺達直々に潰してやらァ」

大物攘夷志士２人は吐き捨てるようにそう言って、先に行った坂本と銀時を追うように出て行った。

しばらく声も出せなかった５人。

正常に働かない脳で分かることは、

あの銀色の笑顔はもう二度と見ることが出来ないということだけ……

言葉の禁……《笑顔》（後書き）

スローペースとなってしまいますが、頑張って連載していきます^^

つかの間の……《夢想》（前書き）

やっと更新したくせに短いです；；

もはや閑話の勢いｗｗ

つかの間の……《夢想》

あの後、とりあえずは1番近い桂の隠れ家に行こうという話になり、向かった4人。

屋敷に着くと、桂の部下達と高杉の間で一悶着起こったが、坂本が黒い笑顔で一蹴し、その場は収まった。

そして桂の私室に入り、現在(いま)に至る。

「ヅラァ、お前けっこう広い屋敷使ってるじゃねェか。しかもこんな江戸の真ん中で、よく幕府の狗に嗅ぎ付けられなかったなァ？」

高杉が、先程文句を言われたお返しなのか何なのか、桂を挑発した。

「フン。高杉、貴様は”灯台下暗し”という言葉を知らんのか。そ

れに人数が多いからな、このぐらいの広さがないとダメなのだ。」

それに負けじと桂も挑発。幼稚な争いであることは否めない。

「……、そんぐれェ知ってらァ。」

間が空いてからのこの言葉。
今回は高杉の負けらしい。

「これから銀時はどうするがだ？萩に戻るかえ？」

不毛な争いをしている2人は放って置いて、坂本が窓際で空を眺めている銀色に問いかける。

「銀時、俺たちへの迷惑などは一切考えるな。」

桂も銀時の方に向き直り、釘を刺す。

「てめェがやりたいと思うことをやればいい。」

高杉もお気に入りの煙管に火を入れながら呟いた。

そう兄達に言われた銀時は、

「まだ……まだ、考える時間ちょうだい。」

と言う。さっきの事がまだ尾を引いている様子で、いつもの銀時のようなだるーっとした喋り方ではない。

そんな弟を見た兄達はこっそりとアイコンタクトをとる。そして桂が立ち上がり、襖の向こうに消えた。

「小太郎は？どうしたの？」

「じきに戻ってくるき」

「そっか。」

安心した様子の銀時。先程高杉から貰った飴を口に入れ、寝っ転がった。

「どうだ？その飴、京都の老舗のモンだぜィ？」

「…！！美味し～い！！」

ようやく笑った。銀時は先の出来事から一ミリも笑っていなかったのだ。

「ありがと、しんすけ〜」

ふにゃり。まさにこの形容詞がピッタリというような笑い方。

（（この顔が見たかったんだッッ！））

兄2人がこんなことを思っているとは露知らず、飴を口の中でカランコロンと転がし、味を堪能している。

一方、兄2人は心の中で全力でガッツポーズをしていた。坂本はともかく、あの高杉もだ。

なぜなら、この2人＋桂&今は亡き恩師　吉田松陽の4人は、揃いも揃って銀時バカなのである。

ご察しの読者様もいらっしゃるとは思うが、この4人の最大級の癒しは銀時のふにゃりと笑う笑顔なのだ。

「持って来たぞ。」

スッと滑らせるように襖を開けて入ってきた桂の手には酒とお猪口。

「おぉ！美味そうじゃのう！」

「てめェが1番最初に反応してどうすんだよ。これは銀時のために用意した酒だろォが。」

「そうじゃった、そうじゃった。」

アハハーと辰馬が笑う。高杉も微かに口角を上げていて、銀時も相変わらずのふにゃふにゃ笑顔。

前にもこんなことあったな、と桂は思う。そう、あれはまだ戦争の時。つかの間の休息だった。

『晋助〜〜、酒あるぜーー』

『銀時、そんなもんどこにあったんじゃ？』

『秘密～……って何でテメーがいるんだよッッ！！テメーじゃなくて晋助に声かけたんだよ！』

『ヒドいぜよーー、わしも混ぜてほしいきに！』

『てめェがいると俺たちの飲む量が減るんだよ』

『ほがなことないぜよ～』

『待て、俺も入れろ！』

あの時は、こんな未来が来るなんて思ってもみなかった。

国を変えられる、護れると、そう思っていた。

…そう思っていたかった。

……う……ろう！小太郎！」

「…！！…何だ銀時か。驚かせるな、心臓に悪い。」

桂が思い出からかえってくると、目の前には自分の自室と3人の顔。

余程思い出に浸っていたらしい。心の中で桂は一人笑う。

「驚かせるなじゃねェよ。銀時が呼んでるってのに、反応しねーてめェが悪ィんだろうが。」

「すまない、考え事をしていた。」

「考え事だァ？考え事なんて酒持ったまんまするモンじゃねェよ。」

せめて俺たちに渡してからにしろ。

そういって高杉は半ば強引に酒を奪い取り栓を開けた。

「高杉だけ独り占めはずるいぜよー」

「そーだそーだ！晋助、俺にも分けろっ！」

銀時はこれからどうするつもりなのか。

その瞳からは何も読み取ることはできない。

きっとどんな道を選んでも困難が待ち受けているだろう

だが今は

今だけはこうして穏やかな時間を過ごさせてほしい。

「おい貴様ら！俺も居るということを忘れるな！」

第二話　end

つかの間の……《夢想》（後書き）

すみません、途中から自分でも何書いてんだかわかんなくなってきましたｗｗ

途中からナチュラルに桂視点です。

わかりづらっ！！

もっと精進するので、もし宜しければ感想、アドバイスなどお願いします！！

特に言葉使い！！

ちなみにうちの高杉さん時々今回みたいになる可能性大です（＾＾）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！！

苦悩、そして……《宣言》（前書き）

第三話！

またまたｇｄｇｄ１２０％でお送りいたします！

感想、お気に入り登録とても嬉しいし、励みになります！

ありがとうございます♪

苦悩、そして……《宣言》

『屍(かばね)を食らう鬼が出てくると聞いて来てみれば……君がそう？』

またずい分と可愛い鬼がいたものですね

『くれてやりますよ、その剣』

剣(そいつ)の使い方が知りたきゃ付いてくるといい

『銀時。太古の昔から、炭水化物と甘いものは合うとされているんですよ』

特別に私の好きな丼の作り方を教えてあげましょう

『皆さん、己の心と己の大切なものを護れる人になってくださいね』

できることなら、最後まで見守っていたかったです。

松陽先生の言葉と慈愛に満ちた笑顔が水泡のようにぽつん、ぽつんと俺の心の内に浮かんでは消えていく。

松陽先生を一言で表すなら、光だ。

銀時という名前。

言葉

読み書き

剣術

応急処置などの医療

そして何より、大切な仲間。

それらは全て松陽先生が教えて、与えてくれたもの。

でも、消えてしまった。

松陽先生を護りきれなかった。

せめて、松陽先生の最期の言葉を守れるように。

そう、俺は強く思った。

だから、戦に出た。

大切な仲間を――晋助、ヅラ、アイツ――を護るため、

護り通すため。

まぁ途中から辰馬も加わったけどな。

万事屋だって、松陽先生が色んなことを教えてくれたからこそ出来た職業。

そこでも出来た、小さな仲間達。

でも離れちまった、

離して、しまった。

俺は、どうすればいいんだ……？

高杉達は、「俺の好きなことをしていい」って言ってくれた。

でも、俺自身好きなことが分かっていない。

しかし昨日、結論は出した。

これでいいのかはわからないが、これでいいんだと自分に言い聞かせた。

良し悪しは神のみぞ知る、ってな。

スッ

音も断りもなく襖を開け、入ってきたのは高杉。どうやら今まで出かけていたらしい。

「何だよ。」

「てめェ、答えは決まったのか。」

入るなりいきなりかよーと、抗議の声を上げてみたものの、完全無視(カト)され、どっかりと窓の縁に腰掛けられた。

「あの～高杉さん？」

「あァ？」

「ここ、一応俺の部屋なんだけど。」

「だからなんだ。」

「どうしてそんなに寛いでるのかなーって」

「別に関係ねェだろ。悪ィことでもあンのかよ？」

「・・・別に。」

「エ●カ様か。」

「わお、高杉が突っ込んだ。」

おどけて言うと、返ってきたのは「ごまかすんじゃねェ」の一言。
お見通しってかコノヤロー

「えー、晋ちゃん冷たーい。」

「死にてェのか？今なら介錯してやるぜィ。」

「それは勘弁。」

「じゃあさっさと俺の質問に答えろ。」

そう言われ、昨日の夜考えに考え抜いた結果を口にする。

「攘夷に戻る。」

そう答えると高杉は眉間に皺を寄せた。

しばしの沈黙の後、

「それでいいのか。」

意外にもこんな返答。

「でも、俺の好きなようにしていいって言ってくれたのは3人じゃん？」

「餓鬼共はいいのか。」

うっ、痛い所を。

気にしてない、と高杉には言ったが本音は心の中でもやもやしすぎて竜巻起きそうなぐらいだ。

何度も、餓鬼共(あいつら)のことは考えた。

嬉しかった。ああ言ってくれて。

でも、不安が拭いきれないのも確か。

あんなこと言ってるけど本心はそう思ってないんじゃないか。

俺に怯えてるんじゃないか。

だからこそ、離れたい。

攘夷に戻るという結論も己の弱さからきたもの。

怖い。

またアイツらに会うことが。

悲しそうな瞳(め)をさせてしまうかもしれないということが

拒絶、されてしまうかもしれないということが。

どうしようもなく、怖い。

俺が沈黙していると、高杉は「分かった」と短い言葉を残し、襖の向こうに消えた。

場所は変わり、桂の私室

そこでは桂が読書、坂本が寝っ転がって天井を見つめていた。

何故坂本がここにいるかというと、先程、銀時の考えを誰が聞きに行くかと揉めに揉め、ジャンケンで決めて高杉が勝利したからである。

「高杉、人の部屋に入るときはノックぐらいしろといつも言っておろう。」

「うるせェよ、てめェは母親か。」

高杉が部屋に入ると、最初に声をあげたのは桂。

続いて坂本が「どうだったんじゃ？」と聞いてくる。

「攘夷(こっち)側に戻るってよ。」

ありのままに伝えると、二人とも固まってしまった。

「新八君とリーダーはどうするのだ。」

数十秒してようやく我に返った2人。やはり気になるのは子供達のことらしい。

「何も言わなかったぜィ？

でも、明らか触れて欲しくねェって顔だった。大方、怖がられたくないとか思ってんだろ。」

銀時の心中を的確に察していた高杉。

そう答えた高杉に対し、そうか……と再び黙り込んでしまった桂。

しばらくして今まで黙っていた坂本がようやく口を開いた。

「じゃあ、わしゃああの二人に会いに行くぜよ。」

「坂本、貴様何をするつもりだ。」

「なぁに、ちっくとあの二人に話をしに行くだけじゃ。」

あっけからんと坂本が答える。それに対し全てを察した様子の桂は本を棚に戻して、ニヤッと笑い、こう言い放った。

「待て坂本。……俺も行く。」

「善は急げじゃ！行くぜよ！」

第三話　end

苦悩、そして……《宣言》（後書き）

はい、意味わかんなーいｗｗ

ごめんなさい。

ホントにすみません。

期間開けまくってるくせにこんなものしか出来なくて……

感想、アドバイスよろしくお願いいたしますっ！

戸惑い……《過去》　上（前書き）

まさかの上中下ですｗｗ

戸惑い……《過去》　上

いつもは賑やかで騒がしく笑顔が溢れているこの空間。

しかしこの店の店主がいなくなってからは言葉も少なくなり、今も水を打ったように静かだ。

店主がいなくなって一週間。今日もこの空間に心の底からの笑顔は……ない。

「神楽ちゃん、もう夜遅いから寝よう？」

「嫌アル。銀ちゃん帰ってくるかもしれないネ。」

神楽は、うつらうつらと舟を漕ぎながらも、絶対寝ようとはしない。それは、普段美容だ何だでさっさと寝てしまう神楽としてはありえない行動で。

どれだけ神楽が銀時を大切に思っているというのかというのがよく分かるものだった。

「新八こそさっさと寝るヨロシ。寝てないのがバレバレアル。」

「えっ……。」

事実、新八も気丈に振る舞ってはいるものの、目の下には濃くハッキリとした隈が存在していて、どれだけ寝れていないのかがよく分かる。

「神楽ちゃん……」

「銀ちゃんは絶対帰ってきてくれるネ。だから、待ってるアル。」

「でも、銀さんは……」

あの時の銀時が二人の脳裏を掠める。

『うん、かえる。松陽先生のところにかえるよ。』

「それにあの時の銀ちゃん、ちっちゃい子みたいだったアル。あん

なに動揺した銀ちゃん初めて見たネ。」

神楽は真剣な顔をして呟く。一方新八はどうしていいのかわからないというような困り顔だった。

「確かに、僕だって銀さんのあんな顔見たことないけど…」

「銀ちゃんは、絶対アタシが護るネ！」

神楽の強い言葉に絆されるようにして、新八の顔も段々明るくなる。
そして、新八も口を開いた。

「僕だって！銀さんのこと絶対護るんだ！」

「やはり頼もしいな、リーダー達は。」

そこへ突如響いた、聞き覚えのある声。声のした方へとっさに振り返ると、黒いモジャモジャと、ストレートの長髪というある意味対称的な二人が扉のところに立っていた。

「「……何でいるんですか！／ネ！」」

「アッハッハッ、お邪魔するぜよー」

「玄関が開いていたからな。」

「そんなこと聞いてるんじゃないんですけど！」

「そうアル！ヅラ、もっさん、銀ちゃんはどうしたアルか！？」

詰め寄ってくる2人を宥め、ソファーに座る。新八が持って来たお茶を一口飲むと、神楽が再度「銀ちゃんはどうしたアルか？」と聞いてきた。

「今日は、その金時のことで話にきたんじゃ。」

「それに2人にも聞きたいことがあるのでな。」

「聞きたいこと……？」

新八が聞き返すと、桂はあぁと頷いてさらに言葉を繋げる。

「まあ、聞きたいことは後でもよかろう。坂本、とりあえず話そう。」

「そうじゃな。まず今、銀時は」

坂本が銀時と呼ぶということはかなり真面目な話ということ。それに気づいた新八と神楽は姿勢を正した。

「ヅラの屋敷におる。」

「ヅラじゃない桂だ。」

「……そんで、銀時にこれからどうしたいかって聞いたら」

桂が言葉を引き継いだ。

「「えっ……？」」

「攘夷も戻る、と。そう言っていた。」

上　end

戸惑い……《過去》　中（前書き）

中です！

私なりの過去なので、批判は受け付けません。

感想、アドバイス等よろしくお願いいたします（＾Ｏ＾）

戸惑い……《過去》　中

「本当、なんですか……？」

「ああ。わしらも今日聞いたばかりじゃがのう。」

そう言って、坂本は新八の出したお茶を一口啜る。

「銀ちゃんは何で攘夷戦争に参加してたアルか？その辺絶対教えてくれないネ。」

何時になく真剣な神楽の問い掛けに、桂と坂本は一瞬視線を合わせて頷き合った。

「今日はリーダーの言う”その辺”の話をしにきたのだ。少し長くなるが、しっかり聞いてくれ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まず、坂田銀時を語るにはある人間(ひと)の存在が必要不可欠だ。

その名を吉田松陽。俺や高杉の師であり、銀時の父親のような存在でもある。

銀時は物心つかぬ内に両親に捨てられてな。…何故か？容姿のせいだ。今はアルビノと言えば分かってくれる人が大半だが、俺達の幼き頃はそんな言葉なかったんだ。

その容姿のせいで行く村々から鬼と蔑まれ、畏れられ拒絶されたらしい。これは松陽先生が話してくださったことで俺が実際に見たわけではないのだが。

銀時は戦場跡で屍を漁って金や食料を手に入れて食いつないでいたんだ。そして鬼と呼び、襲ってくる人々を殺していく……あやつは松陽先生に出会うまでそんな生活を送っていた。

このような環境で銀時が普通の子に育つはずがなかった。俺達や先生と出会った時は感情と呼べるものは何も持ってはいなくてな、無表情でただ刀を抱えていただけだった。

でもそのうち段々と感情を持ちはじめてきた。喜び、怒り、悲しみ……初めて銀時が俺達の前で笑った時なんかは思わず小躍りしたものだ。思えば松陽先生が親バカになったのはあの頃だったかもしれん。

しかし、そんな時間も長く続かなかった。リーダーは知らないかもしれないが、昔、安政の大獄という攘夷思想を持った人々が大量に処刑されたことがあった。

先生は危険な攘夷思想を持ち、それを俺達のような子供に教えているとして処刑されることになってしまったんだ。

……悔しかった。ただ悔しかった。先生は危険な攘夷思想など持ち合わせてはおらなかった。むしろその逆で、話し合いで天人との争いを止めようとしていたんだ。

俺達は必死に抵抗した。だが、所詮俺達も子供。全く聞き入れてもらえずに、とうとう処刑の日が来た。

俺は…俺達は、その日を忘れるなんて出来ないのであろう。群がる大人を掻き分け、必死に手を伸ばして、松陽先生と名前を呼んだ。そんな中でも松陽先生は微笑(わら)ってこうおっしゃったのだ。

”皆さん、己の心と己の大切なものを護れる人になってくださいね。――できることなら、皆さんを最後まで見守っていたかったです。”

その後は……すまない、よく覚えていないんだ。気づいたら、布団の中だったのでな。

俺達は憎んだ。幕府も、天人も。

しかし、幕府や天人を1番憎んでいたのは銀時だ。銀時は誰よりも松陽先生を大切に思っておったからな。だからこそ、俺は久方ぶりに再会したときにかなり驚いたのだ。天人であるリーダーと共にいたことに。

そして、高杉は戦に出て松陽先生の仇討ちをしたいと言った。

俺も、仇討ちと同時にこの国を変えなければならないと言った。

そして銀時はそんな俺達を護る、と言って攘夷に参加したんだ。

銀時(あやつ)は銀時(あやつ)なりに先生の最期の言葉を守ろうとしておったのだろう。

そして高杉は…高杉もまだ松陽先生が世界の中心なのだ。

だから、先生を奪ったこの世界を壊そうとしている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これが、俺や銀時が攘夷に参加した理由だ。」

桂はそう話を締め括った。新八や神楽は銀時の過去に何も言えないようだ。

「銀時は、今まで必死に生きてきたんじゃ。死んだ魚の目と言われちょるあの目も、色んな感情がごっちゃになってそれを押さえ込む為にあんな目になっとるんじゃないかとわしは思っとる。」

坂本の言葉に、新八と神楽は銀時の綺麗な深紅の目を思い出す。確かに死んだ魚のような目をしているが、その目は本人も言っている通り、輝く時は輝き、怒りや喜びを目に映す。しっかり感情を宿すのだ。

そんな2人を見て、桂と坂本は再度頷き合うと、茶を啜り、こう切り出した。

「そんで、質問なんじゃが……」

中　end

戸惑い……《過去》　下（前書き）

やっと上中下完結しました！

お待たせいたしました。

戸惑い……《過去》　下

「おまんらは、あん時の銀時ば見てどう思ったがや？」

直球すぎる坂本の質問に黙り込む新八と神楽。そんな様子を見て、「正直に言ってくれて構わない」と桂が助け舟を出す。

「……正直、驚きました。いつも僕達の前では飄々（ひょうひょう）としてて、怠そうな喋り方をしているのに、あの時はすごく幼く見えました。」

「あんな銀ちゃん初めてだったネ。銀ちゃんがアタシより小さく見えたアル。」

「そうか。」

二人の言葉に小さく頷くと、更に質問を重ねる。

「じゃあ、二人はこれからどうしたいんじゃ？」

「銀ちゃんに会いたいアル！会わせるネ、もっさん！」

「新八くんはどうなんじゃ？」

「僕だって！…僕だって銀さんに会いたいです！」

「……そうか。」

新八と神楽の強い意志と瞳を見て、万事屋に来てから一度も笑うことのなかった桂がようやく微笑(ほほえ)んだ。

「やはり、来てみて正解のようだったな、坂本。」

「そうじゃな。」

坂本も、朗らかに笑った。

「2人とも行くぜよ！」

そして、唐突にこう言った。

「「……え？」」

「おんしら、金時に会いたいんじゃろ？なら、行くぜよ！」

坂本の明るい笑顔と言葉に2人の顔も見る見るうちに明るくなった。

「「はい！／おうヨ！」」

桂、坂本が新八と神楽に会いに行っているころ、高杉もまた外に出ていた。

いつもの派手な着物に、一応の変装のためか編笠を被りゆったりと歩を進める。しばらくしてたどり着いたのはこぢんまりとした建物。少し古びた看板には、「久坂診療所」の五文字。どうやらここは病院らしい。

「……。」

一度足を止め、無言で佇むと少し口角を吊り上げて笑い、再び歩き出す。

正面から入るのかと思いきや、高杉は裏口に回って扉の横の呼び鈴を鳴らした。程なくして一人の男が姿を現し、高杉を見ると「お待ちしておりました」と深々と頭を下げる。そして、

「高杉さん、どうぞこちらへ。」

と言って高杉を奥へ通した。

「ただいま呼んでまいりますので、少々お待ちください。」

高杉をある一室に通し、一礼して部屋を出ていく。高杉が慣れた手つきで煙管に火を入れ、吸っていると音もなく襖が開いた。

「やぁ、久しぶり、晋助。」

開いた襖の向こうに立っていたのは、穏やかな笑みをたたえた男。

「よォ……久しぶりだな。」

最後に会った時と全く変わらないその笑みに、高杉も笑みを返す。

「君がここに来ると言うことは、誰かに何かが起こったと受け取っていいのかな？」

「あァ、構わねェぜ。」

「そうか。で、何だい？」

「とりあえず、ンなとこ突っ立ってねェで座れや」

玄内

そう呼ばれた男は、さらに笑みを深めた。

下　end

巡逢ノ音……《再会》（前書き）

大っっっっっ変！お待たせいたしました！！

しかも、お待たせしたわりには短いです（^__^；）

巡逢ノ音……《再会》

「「銀さん／ちゃん！！」」

「……は？」

何でお前ら……

銀時の口から零れ落ちたのは、心からの本音。
困惑した表情（かお）の銀時に神楽と新八は優しく微笑（わら）いかけた。

「桂さんと坂本さんに連れてきてもらいました。」

「どうしても、銀ちゃんに話したいことがあったアル。」

「えっ……？」

未(いま)だ状況を飲み込めず、困惑ぎみの銀時を、新八と神楽は強い瞳で見つめる。

「僕たちは、銀さんにずっと着いて行きます。」

強い決意を綴る言葉の端々に滲ませる新八。

「ずぅーーーーっと、銀ちゃんの味方アル！」

どんな銀ちゃんでも、大好きヨ。

そう言って、二人は銀時に抱き着いてきた。
そんな二人に、銀時はどうしていいのか分からず、襖のところに立っていた桂と坂本に視線を向ける。

「「……（コクッ）」」

ゆったりと、それでいて強く頷いた二人を見（み）、己に抱き着き、胸に顔を埋めている二人を見て、銀時は破顔した。

「新八、神楽……サンキューな。」

顔をくしゃくしゃにして、心からの笑みを零す。

銀時の胸から顔を上げ、その笑顔を見た神楽と新八はやっと心からの笑顔を見せた。

小さな家族の姿が、そこにはあった。

「連れてきて、正解だったな。」

「そうじゃのう。」

そんな三人を見て、桂と坂本も微笑む。
暖かい空間が、穏やかに広がっていた。

と、そこに乱入者が。

「おいおい、何が起こってんだァ？」

乱入者の正体、高杉晋助はニヤリと笑い、部屋に入って来る。

「高杉、晋助…！」

その姿を見て、軽く硬直した新八。
そうなるのも無理はない。新八と神楽は妖刀紅桜の時の高杉しか見ていないからだ。
そんな姿を見た銀時は、ポンッと頭に手を乗せぐしゃぐしゃっと髪を掻き回す。

まるで、安心させるかのように。

「どこ行ってたんだよ〜。」

何喰わぬ顔で銀時が高杉に尋ねると、高杉は、口角を吊り上げてニヒルな笑みを見せ、「銀時ィ、人一人連れてきたぜェ。」と言う。

「人？」

そんな高杉の言葉に銀時が首を傾げると、高杉は「入っていいぜ。」とその人物を招き入れた。

「やあ、銀時。」

「えっ……」

穏やかな笑みをたたえて襖の向こうから現れた長身の男に、今度は銀時が固まる番だった。

「玄内……？」

「おや、しばらく会わないうちに、幼馴染の顔まで忘れたのかな？」

「いや、違(ちが)くて……ホントに玄内？」

「うん、久坂玄内だけど？」

「マジでか。」

「マジだよ。」

「…！！玄内、久しぶりだな。」

「まっこと久しぶりじゃのう。」

そこでやっと我に返った桂と坂本。思い思いに玄内に話しかけた。

「そうだね。小太郎はともかく、辰馬は戦争時以来かな??」

「そうじゃったかのう?」

「そうだな、坂本は戦争時以来だと思うぞ。」

「ほうか。そういえば、玄内は何でこんなところに来とるんじゃ？」

「実はさ……」

再会　ｅｎｄ

ひとりよりも……《集結》（前書き）

第九話！

自己紹介です！

では、どうぞっ

Ｐ．Ｓ．　アクセス数１００００、ユニーク数２０００突破しました！

お気に入り登録してくださっている皆様

感想を書いてくださる皆様、

読んでくださっている皆様、

本当にありがとうございます！！

これからもよろしくお願いいたします！！

「実は…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「んで？どうしたの？」

「銀時の正体を幕府の狗に嗅ぎ付けられてなァ。」

高杉が用件を玄内に伝えると、

「わお。ホントに？」

玄内は大してないくせに、驚きをわざわざ口に出した。

「俺が冗談言うとでも思ってんのかァ？」

「いや、思わないけど…」

「それに、有事の時には報(しら)せろとか言ってやがったのはどこのどいつだよ。」

「俺だ。」

終戦の際にした、ただ一つの約束を高杉が言うと、玄内はあっけらかんと笑う。

そんな玄内に高杉は溜息を零し、己の煙管を一層深く吸い込んだ。

「でもまぁ、」

突如玄内が発した言葉。その声音は先程とは打って変わって、ひどく冷たいもの。

「銀時を傷つけるような奴には制裁加えてあげなきゃね……？」

高杉はその言葉を聞いた瞬間ハッとした。持ち前のポーカーフェィスで表情には出さなかったものの、内心はあることを思い出してかなり焦っていた。

「（そういや、こいつ松陽先生に次ぐ銀時バカだった……！！）」

「……晋助？」

「……！！なっ、何だよ」

「いや、ボーッとしてたからさ。気分でも悪いかい？」

そう聞いてきた玄内の声音はいつもの穏やかなものであり、高杉は安心すると同時に、さっきのことは空耳ということにしておこうと決意した。

「ンなこたァねェよ」

「ならいいんだけどね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ銀時に会いに行こうってここに来た次第さ。」

玄内は一通り伝えると、聞いているメンバーをぐるっと見回し、最後にこう付け足した。

「まさか晋助が来るとは思って無かったけどね。」

「あァ？てめェそれどういう意味だよ。」

イラッときた高杉が睨みつけても玄内はどこ吹く風。「思ったことを言ったまでじゃないか。」と軽く流した。

「あの、」

不意に聞こえた声。聞こえた方を向くと、新八が軽く手を上げている。

「ん？」

「その約束って、…げっ、玄内さんと高杉さんの間で、交わされたものじゃ…ない、んですか？」

所々詰まらせながら聞いてきた新八。恐らく、彼の心内でこの空気の中で聞いていいのかという微かな怖(おそ)れと玄内を果たしてどう呼べ

ばいいのかという少しの葛藤があったに違いない。

「あぁ〜、ううん、みんなの間で交わした約束なんだ。だから余計晋助が来たことに驚いてね。」

ほら、晋助ってそういうタイプに見えないでしょ？

続いた言葉に首を縦に振ったのは万事屋の三人のみ。高杉はもうどうでもいいとばかりに呆れ顔で煙管を吹かし、桂と坂本は薄く微笑んでるだけだった。

「…え？ヅラと辰馬は高杉そういうタイプに見えないの？」

そんな二人を見て銀時が疑問の声を上げると、桂は「ヅラじゃない桂だ」と言った。しかし坂本は何も言わず、玄内の方を目線で示す。そしてそれに合わせるように玄内は更に言葉を紡いだ。

「でもね、よく考えれば分かったことなんだよ。」

「え？」

「だって晋助は銀時バカだから。」

「「「……えぇぇぇぇぇ！！」」」

少しの沈黙からの大絶叫。全くタイミングが同じだ。

「嘘だぁー、絶対嘘。高杉が俺バカ？ナイナイ、絶対ナイ。ありえない！！」

「そうアル！片目が銀ちゃんバカとかある訳ないネ。」

「むしろ高杉さんが銀さんバカとか想像出来ないです……」

「てめェらなァ……！！」

思い思いの反応をする三人を見て、高杉はこめかみに青筋を浮かび上がらせる。そして、銀時につかみ掛かろうとした高杉を桂が止め、坂本が宥める。

「……クスッ」

そこに突如聞こえた笑い声。その主は玄内だった。

「何笑ってやがんだてめェ。事の発端は全ててめェだろうが。」

「いや、何か面白くって。」

キレている高杉に笑顔で返すという凄技をサラリとやってのける玄内。高杉がさらに言い返そうとするのを銀時が遮った。

「でも！高杉が俺バカってのは絶対無いから！」

「……んー…」

「玄内。」

悩む素振りを見せる玄内に桂が声をかける。

「何？小太郎。」

「銀時に何言ったって自覚しないぞ。」

「……そうかもね。」

そう言って玄内は苦笑を零し、「銀時がそう言うならそれでいいや。」と続けた。

「何だよそれ。」

銀時が少しふて腐れるとまた坂本が宥め、桂が微笑(わら)う。高杉は煙管を吹かし、玄内は親の様に見守る。

そんな光景を目の当たりにした新八と神楽はこの五人の絆は生半可

なものではないのだと直感的に感じた。

そして、心の中に生まれたのは……”　　”

「そういえばさ、俺自己紹介してなくない？」

「そういえばそうだな。」

急に話題を切り替えた玄内に普通に返す桂。桂曰く、玄内の急な話題転換はよくあること、らしい。

「じゃあしなくちゃね。俺は久坂玄内。晋助、小太郎、銀時の幼なじみだ。ちなみに歳は27。好きに呼んでくれて構わないよ。」

「志村新八、16歳です！よろしくお願いします、久坂さん。」

「神楽アル！ピッチピチの１４歳ネ！玄ちゃんって呼んでもいいアルか？」

「ああ。」

にこやかに自己紹介をし合う三人を見て、不意に銀時から零れた笑み。それを見ていたのは空に浮かぶ三日月だけだった――

集結　ｅｎｄ

ひとりよりも……《集結》（後書き）

何か…何が書きたいんでしょうね、私。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました！！

瞳の奥……《感情》（前書き）

記念すべき（？）第１０話です！

気づいたんですけど、一ヶ月前も2日、８日、１４日に投稿してるんですよね、私（笑）

とりあえず、感想やアドバイス頂けると嬉しいです＾＾

よろしくお願いいたします♪

瞳の奥……《感情》

「新八、神楽。」

次の日の朝。少し遅めの朝餉(あさげ)を済ませ、部屋でのんびりしていた新八と神楽。そこに突如、銀時が顔を覗かせる。

「銀ちゃん、そんな顔してどうしたアルか？似合わないアルよ。」

そう茶化すように言った神楽だが、銀時の纏(まと)う真剣な空気に気づき、起き上がる。

「何か、あったんですか？」

新八も体ごと銀時の方へ向け、姿勢を正した。そして、部屋に入ってきた銀時は、畳に座りこう切り出した。

「あのな。オメーらには、」

万事屋に戻ってほしい。

「「……えっ…？」」

銀時の口から出てきたのは、予想を遥かに逸(いっ)した言葉。
その言葉に込められた意味が分からず、新八と神楽は戸惑うことしかできない。

「……なっ何でアルか！私、ずっと銀ちゃんの味方って、傍にいるって言ったネ！！」

「僕だって！！…僕だって銀さんと一緒にいたいです！」

「えーっと、まず人の話は最後まで聞け。な？」

そう言って笑った銀時はいつもののらりくらりとした態度とあまり変わらず。
しかし、目だけは真剣な光を放っていた。

「…はい。」

「分かったアル。」

「ん。……ついさっき、五人で話してたんだけど、オメーら二人が急にいなくなったら恐らく俺達を追ってる真選組が怪しむだろ？」

「……確かに、この一週間で万事屋の周りに真選組の人は多く見てました。」

新八は思い出すように喋る。銀時が万事屋を離れて一週間、真選組が万事屋の前を通る回数が格段に上がった。神楽もそれに頷き、銀時はその反応を見てさらに言葉を続けた。

「だから、オメーらには万事屋に戻って普段通りにすごすフリをしてもらいてーんだ。」

「フリ、アルか？」

「ああ、フリだ。だから離れるわけじゃねーよ。」

「ってことは、何かやるんですね？」

銀時の言葉に込められた裏の意味を汲み取り、新八が問う。

「ああ。お前らにはーーーー。」

「じゃあ、僕達は戻りますね。」

「ああ、頼んだぜ。新八、神楽。」

「任せるアル！」

そう言って神楽はニカッと笑った。頼もしくなった二人を見て、銀時は笑いを零すと、玄関まで送るために腰を上げた。

「帰るのか？」

「ヅラ！」

「ヅラじゃない桂だ。頼んだぞ、二人とも。」

廊下ですれ違った桂が声をかけてきた。その言葉に新八と神楽は顔を見合わせて笑い、銀時は呆れたように溜息をつく。

「どうしたのだ、急に笑ったりして。」

「ヅラ、銀ちゃんと同じコト言ってるアル！」

「テメー、被らせてんじゃねーよ。」

「なっ！そのようなことを言われても、俺は先程のやり取りを聞いていないのだから仕方ないであろう！」

「うるせーよ。オラ、行くぞ。」

軽く憤慨(ふんがい)した桂を華麗にスルーし、銀時は二人を促す。

「はい。」

「何でサドがこんなことにいるアルか！」

「神楽ちゃん落ち着いて。」

あの後(あと)隠れ家を出た二人は、銀時に貰ったお金を使い、スーパーで買い物を済ませた。

そして今に至る。何故(なぜ)か沖田が万事屋の階段のところによりかかっていたのだ。

「沖田さん、どうしたんですか？」

「今日は話があって来たんでさァ。」

「話、ですか？」

「そうでさァ。」

「旦那に、連絡を取りたいんでィ」

歯車が、音を立てて、廻りだす。

end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9553y/

もう二度と…

2012年1月14日12時45分発行